「事例で学ぶNetモラル」セミナー in 東京

ネットモラル

広教ニューズレター
Vol.46
広教 HIROKYO 2026.11
https://www.hirokyou.co.jp/

次期学習指導要領を見据えて
学びにおける生成AI活用と、情報活用能力の関係性



情報活用能力の育成をした先にある子供の具体的な姿をイメージできていますか？
生成AIが学びを支える時、情報活用能力はどこに活かせるのでしょうか。子供だけではなく教員、保護者すべての人にとっても必要な情報活用能力の育成と発揮について考えます。

セミナー内容

講演①

AI活用で目指す学校教育のこれから その中で問われる情報活用能力 ～活用のヒントとともに～

信州大学 学術研究院 教育学系 准教授の佐藤 和紀 氏による講演。



講演②

各教科の授業の中で必要とされる情報活用能力

千葉大学 大学院 教育学研究院 准教授の八木澤 史子 氏による講演。



実践発表

①沖縄県浦添市教育委員会
②東京都中央区教育委員会

沖縄県浦添市は、2026年から本格的に生成ＡＩを導入するにあたり、試行錯誤を重ねる現状を紹介。一方で、早くから導入を推進する東京都中央区からは、多くの実践事例を紹介した。



動画を公開中

各講演・実践発表の動画を公開中(2027年3月31日まで)
右の二次元コードからお申し込みのうえ、ご覧ください。

実践発表

生成AI活用をどう支え、どう広げるか 2つの自治体の実践と対話から学ぶ



発表者
沖縄県浦添市教育委員会 浦添市立教育研究所 指導主事 **池田 崇** 氏
東京都中央区教育委員会 事務局 指導室 教育DX担当係長 **中島 淳** 氏

●浦添市の発表 学校と市教委が「二人三脚」で進める生成ＡＩ活用

浦添市教育委員会では、ＧＩＧＡスクール構想以前から、学校現場に寄り添いながら、学校と市教委が「二人三脚」でＩＣＴ活用を進めてきた。生成ＡＩについても、その関係を土台に、「手探り」で取り組んでいる。生成ＡＩは子供たちの学びを深め、先生方の創造性を広げるものだと市教委は考えているが、学校現場からは「なんだか怖い」という不安の声もあった。そこで各校の担当者による先行研究、校内研修、保護者への説明など、先生方が安心して活用に踏み出せる環境を一歩一歩整えていった。研修では「事例で学ぶＮｅｔモラル」も活用しながら、先生方の不安に寄り添い、生成ＡＩの必要性や重要性を周知することに努めた。まずは先生自身が生成ＡＩの価値や可能性に納得感を持つことを大切にしたという。

その結果、各校で生成ＡＩの活用が芽吹き、広がりつつある。ある学校では、廊下での安全な過ごし方を意識してもらおうと、生成ＡＩで作詞・作曲した音楽を休み時間に流しているという。池田氏は「『手探り』は弱みではなく、学校現場と一緒に悩めるという浦添市教委の強みです」と発表を締めくくった。



浦添市の発表スライド

●中央区の発表 まず使い、学び、広げる生成ＡＩ活用

中央区教育委員会では、デジタル技術を「制限する」のではなく、子供たちがデジタル社会を生き抜く力を身につけることを重視し、デジタルシチズンシップ教育を推進してきた。生成ＡＩについても同様に、「まずは使ってみる」ことを重視している。「使ってくれる人がどんどん使わないと、どんな課題が出るかわからない」と中島氏は話し、効果的だった場面や課題を集めながら活用を広げている。

実践例として、中学校3年生の英語の授業では、日本の昔話を題材に英文の４コマ漫画を生成し、受動態の使われ方を見つけて相互評価したり、社会科では生成ＡＩを活用して架空の会社へのシミュレーションを行い、お金や為替の動きを考えるなど、ユニークな活用が行われている。

さらに、ＩＣＴ事例共有サイトを開設。授業や校務での活用事例やプロンプトを共有している。「まず使い、そこから学ぶ」という姿勢で、実践と共有を重ねながら、区全体へ横展開し、現場の知見を高め合っていくことに期待を込めた。



中央区の発表スライド

●ディスカッション 試行錯誤を学びにつなげる

事前質問や会場からの質疑を通じ、現場での試行錯誤を学びにつなげる議論が行われた。

浦添市の池田氏と中央区の中島氏の実践発表を受け、信州大学の佐藤氏は「実践しないと課題も生まれない」と試行錯誤できる環境の重要性を提示。池田氏は教員が「なぜ今デジタルか」という教育的意図を持つ大切さを語り、中島氏も現場での工夫を共有した。

最後に佐藤氏は、メディアとの関わりは「遊び、練習、実践」の順とし、失敗できる「余白」を学びにつなげる重要性を訴えた。

教員研修・出前授業のご案内

教員向け研修や、**児童生徒・保護者向けの出前授業**を広教がサポートします。**対面・オンライン**などご希望の形式に対応いたします。

詳しくはこちら

広教ニューズレター は、広教が提供するサービスの最新の活用事例や、情報活用能力の育成に取り組んでいる自治体の先生の声をお届けしています。
Web版もオープン！より気軽に閲覧いただけるようになりました。
広教ニューズレター 検索

広島県教科用図書販売株式会社
〒733-0032 広島県広島市西区東観音町15番12号
TEL：082-291-1088 FAX：082-291-1082
URL：https://www.hirokyou.co.jp/
E-mail：info-hiroshima@hirokyou.co.jp

講演①

「育てたい子供の姿」から情報活用能力を考える



発表者

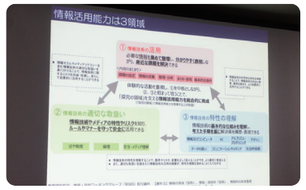
信州大学 学術研究院 教育学系 准教授 **佐藤 和紀** 氏

生成AI時代に求められる情報モラルとメディアリテラシー

佐藤氏はまず、「情報活用能力は、そもそもなぜ必要なのか」と参加者に問いかけた。次期学習指導要領では情報活用能力の抜本的な向上が求められるが、「国がやると言っているから」だけでは、教師も子供も保護者も納得しにくい。「深い学びを実現するために、情報活用能力がどのように寄与するのか。それを子供の具体的な姿で説明できるようになってほしい」と佐藤氏は語りかけた。

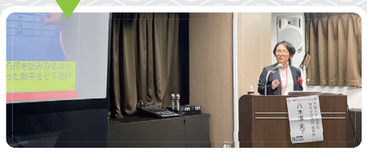
情報活用能力には、情報技術の「活用」「適切な取扱い」「特性の理解」という三つの構成要素がある。例えば生成AIなら、「活用」の仕方を身につけるだけでなく、著作権や肖像権などに配慮して「適切に取り扱い」、ハルシネーションなどの「特性を理解」してこそ、安全かつ効果的に「活用」できる。「三つの要素をバランスよく育てることが重要だ」と、佐藤氏は強調した。

また佐藤氏は情報モラル教育に加え、今後はメディアリテラシーという考え方も重要になると指摘した。これまでも国語などでメディアリテラシーに関連する学習はあったが、継続的・体系的に学ぶ機会は十分ではなかった。メディアリテラシーが重視される背景には、生成AIの普及により、偽情報や誤情報を容易に発信したり、拡散したりできるようになったことがある。

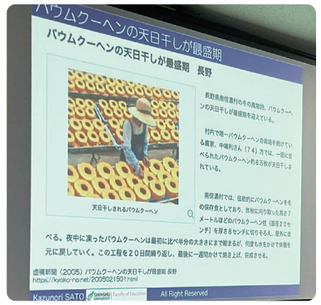


佐藤氏の発表スライド

佐藤氏は、「大人にはすぐに『嘘だ』と見抜けるフェイクニュースでも、子供だと信じてしまうことがある」と語る。例として、ある小学校では、虚構新聞の「バウムクーヘンの天日干しが最盛期」という記事を見せたところ、多くの子供たちが信じた。しかし一方で別の学校では、多くの子供が「嘘だ」と見抜いた。後者の学校では、情報源や発信者、他のメディアでも同じ情報が発信されているかなどを確かめるリテラシーを積み重ねていたからだ。佐藤氏は、こうして身につけた力を他の学習場面でも発揮できることが重要だと語った。佐藤氏は、「情報活用能力、情報モラルとして、子供たちがどんな学びを学んで、何ができるようになれば、偽情報や誤情報をすぐに信じず、立ち止まって考えることができるのか。そのバックグラウンドを考え、意図を持って教育することが重要だ」と語った。生成AIに対しても同様で、出力された情報を鵜呑みにしないために、子供たちに何を学ばせておくべきなのか考える必要があると訴えた。情報の真偽や生成AIのリスクに向き合うには、どのような子供に育てたいのかを具体的にイメージし、そうなるには「事例で学ぶNetモラル」などの教材で何を学び、どう積み上げ、どんな場面で力を発揮できるようになればいいかを考える必要がある。「教育には『意図』があるべきです。その意図が子供に届き、意図に合った子供が育っていくようにしなければなりません。具体的な子供の姿、学習者像を持ち、それをまわりの先生方に伝えていくことが大切です」と、佐藤氏は講演を締めくくった。



佐藤氏の発表スライド



佐藤氏の発表スライド

講演②

情報活用能力を「身につけ」、各教科で「発揮する」

発表者

千葉大学 大学院 教育学研究院 准教授 **八木澤 史子** 氏

「端末活用」と「学び方」をセットで育てる

八木澤氏は、各教科の授業で情報活用能力をどう発揮させるかについて、実践例をもとに解説した。次期学習指導要領では、総合的な学習の時間などで情報活用能力を「身につけ」、各教科で「発揮する」ことが求められる。その際に重要なのは、端末を操作できることだけではなく、情報をどう読み取り、考え、課題解決につなげるかという「学び方」をセットで身につけることだと、八木澤氏は指摘する。

まず八木澤氏は、各地の実践を例に説明した。たとえばある高校の国語科では、物語の登場人物像を考察する際、本文からその根拠となる箇所を探し、本質を表す抽象語を使ってまとめる方法を指導している。ある中学校の社会科では、集めた情報をスライドに書き出して終わるのではなく、知識同士の関係をとらえ、構造化する方法を学ばせている。また体育で試技の様子を端末で撮影する場合も、何のために撮るのか、そのためにはどこを撮るのかまで焦点化して、子供たちに意識させる必要がある。理科で実験データを端末に入力する場合も、どの数字に注目し、何と何を比較するのかまで考えさせる必要があると説いた。



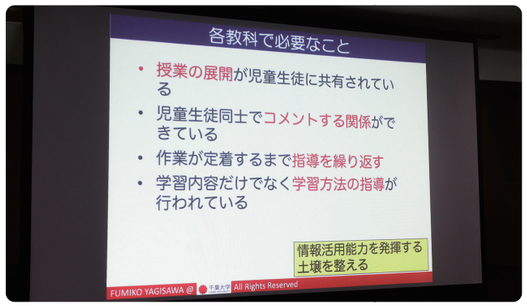
八木澤氏の発表スライド

「ただ端末を活用すればいい、ということではありません。この場面では、子供たちに何を学ばせるのか。教科の学びなのか、学びかういったことを、教材研究や授業研究として考えていくことが大切です」

ただし、最初から端末を深い学びのために使えるわけではない。スライドへの書き込みや撮影、表計算ツールへの入力など、まずは使うことに「慣れる」段階も必要だ。大切なのは、「今は何のために使っているのか」「その先にどんな学びがあるのか」を教師や管理職、教育委員会が見通しておくことだと、八木澤氏は言う。さらに、情報活用能力を発揮する土台として、授業の展開を子供と共有することや「学習方法」の指導に加え、子供たちが互いに尊重し合ってコメントできる人間関係を築くことを、八木澤氏は列挙した。たとえば共同編集がうまくいかない場合も、操作技能だけでなく、こうした学級経営や学習規律に目を向ける必要があるのだ。そして、端末を「使える」だけでなく「適切に使える」ようになるためには、情報モラルも欠かせない。決められた使い方を守ることはもちろん大切だが、ゆくゆくは子供自身が使い方を考えられるように成長させていきたい。そのためには、子供だけでなく、教師や保護者も情報活用能力を高めていく必要があると、八木澤氏は講演を締めくくった。



八木澤氏の発表スライド



八木澤氏の発表スライド

事例で学ぶ Netモラル

新 「情報技術の仕組み」を追加！

「仕組みを知る」が「正しく使う」第一歩！

情報技術の特性や仕組みについて学べるカテゴリーが新しく追加されました。仕組みを事例アニメでわかりやすく解説しています。



詳細はこちら

生成AI活用の第一歩に役立つ資料を公開中

授業や校務での進め方をご案内



講演でも、生成AI時代の情報モラルを考える大切さが語られました。
参加者からも「今後どう進めるべきか」という声が多く届き、
授業や校務での導入に役立つ資料をご用意しています。

二次元コードのリンク先より、資料をご覧いただけます。